

 論文

社会思想社の一側面(下)

田中九一と東大新人会OBの動向

梅田 俊英

はじめに	4 中間派と社会思想社(以上, 479号)
1 社会思想社の創立と初期同人	5 社会思想社の活動
2 田中九一について	6 社会思想社の解散
3 社会思想社の発展	展 望(以上, 本号)

5 社会思想社の活動

社会思想社の業績として、まず雑誌『社会思想』を7年余にわたり継続的に発行したことをあげることができる。この蓄積に立って『社会思想叢書』(同人社発行)ほか社会科学・社会問題関係著書が精力的に刊行され、社会思想社は近代日本において、世界にもまれなマルクス主義を中心とした社会科学研究の熱を高揚させるのに貢献したといえよう。その団体が行ったそのほかの社会的活動として次の4点をあげることができる。

第1に、1928年から33年までの『マルクス・エンゲルス全集』(改造社版)の編纂へ参加したことである。社会思想社メンバーのほとんどが翻訳に参加している。世界で唯一の『マル・エン全集』が日本で誕生したという事実を思い起こすことが必要であろう。

第2に、『社会科学大辞典』の編纂をあげることができる。これは社員の石浜知行と佐々弘雄が九州大学を思想問題で解職されたことをきっかけに、その生活を保障するために開始されたものである。1927年5月半ばに第1回編纂委員会が開かれて1930年5月に同書は完成した⁽⁵⁴⁾。類書のなかで群を抜く詳細さで、社会思想社とその周辺の知的水準の高さを示すものとなった。

第3に、労働教育への参加をあげよう。これは有島武郎の遺産を使って行われたものである。有島の遺産を受贈することになる回想を引用しよう。

「年度ははっきりしないが、社会思想社をつくって間もなく、あれは震災の直前になると思うが、社会思想社のメンバーの一人、矢木沢善次が、有島武郎さんから金をもらわないかといひ出した。矢木沢は一高から京都大学に来て、有島さんに出入りしていた。……有島さんのお考えをいかして、

(54) 『社会科学大辞典』(改造社)「刊行の辞」。

おれたちにできるのは労働教育だろう、それから労働教育以外にも何かやろうということで「いただきます」といった。」⁽⁵⁵⁾

林要は、「有島武郎の遺書」として「八木沢善次は新人会には関係なかったが、社会思想社の一員であり、有島とは物心両面にわたり深く結ばれていた。そんなわけで、たとえば有島は1920年10月27日付の八木沢の病氣見舞いの手紙にも、「昨夕新人会に行っ」たことを知らせ、...そんな関係で、社会思想社は八木沢によって有島武郎との連絡の道をおのずから持つことになっていた」と述べている⁽⁵⁶⁾。ところが、いつまでたっても金が届かない。「彼には遺書があった。それを見たのは、有島一族のほかでは足助素一、吹田順助らの2、3人だけであった。弟有島生馬の計らいだったにちがいない。遺言のうち財産処理に関する部分は、ついに公表されなかった。そこには、親からの遺産全部の処理を社会思想社に一任する旨の記載があった。そのことを八木沢善次から知らされた社会思想社のわれわれは、この八木沢を通じて有島生馬と折衝することになった。.....そこで兄弟の主張を加えて2で割って誕生したのが、有島財団であり、労働教育会であった。

社会思想社は、この機関をとおして、そのころ全国諸所に芽生えつつあった労働者教育を援助することになったが、交渉の過程で遺産の分与額が値切られたうえ、分与された日本郵船株が不況でたえず低落しつつあったので、社会思想社の利用できる金額はあまり多くなかった。これを有効に労働者教育のための諸機関に配分するのが、社会思想社の、これに関する仕事となった。」⁽⁵⁷⁾この日本郵船の株の額は次の回想からわかる。

「労働教育をするのに建物を建てなければならないから、30万円ぐらいはどうしても要る、といったと思う。そんな金はとてもない、といって、30万円にはならんけれども、10何万円かの郵船会社の株をくれた。ところがガタガタッと下がってしまって、もらったときには8万円だか4万円だか - 記憶が確かではないが - になっていた。」⁽⁵⁸⁾少なくなったといっても大金には違いない。こうして労働教育会が発足するのである。有島の遺産は次のように処分された。

「有島武郎氏の遺贈による日本郵船旧株500株は本年(1924年...引用者)1月25日に受理し、4月5日日本社第一回年次大会に於て次の如く処分方法を定めた。

- 一、350株を以て財団を作り労働教育の補助をする。
- 一、50株は労働法律基金に充てる。大阪及東京の自由法律相談所の設立は即ち之である。
- 一、37株は労働教育に関する出版費とする。
- 一、37株は大阪労働学校の建設費に充てる。
- 一、26株は労働事情調査費に充てる。」⁽⁵⁹⁾

自由法律相談所は細野三千雄らの開設したものである。関東大震災後ここが社会思想社の本社となる。つまり有島の遺産は『社会思想』そのものを支えたといえる。労働教育会の具体的な事業は

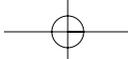
(55) 前掲、『平貞蔵の生涯』138～139頁。

(56) 林要『忘れ得ぬ人々』岩波ブックセンター、昭和63年、16頁。

(57) 同前、17頁。

(58) 平、前掲書、139頁。

(59) 『社会思想』24年8月号。



当時全国的に盛んに成りつつあった労働教育運動に金銭的な補助を与えていくことであった。6月19日の理事会で次の労働学校に補助が与えられることになった。

日本労働者教育協会の労働学校 大阪労働学校 京都労働学校 尼ヶ崎労働学校 神戸労働学校

例えば、京都労働学校では波多野鼎、林要、住谷悦治などの社会思想社の社員が講師となっている。社会思想社などに参加している社会的知識人の活動の場が労働学校運動の盛り上がりと共に拡大したといえる。ところで、労働教育会の理事は以下の通りである。

有馬頼寧 安部磯雄 左右田喜一郎 高野岩三郎 吉野作造 三輪寿壮 平 貞蔵

大原社会問題研究所所長の高野がいるように、社会思想社と大原社研との協調がここから始まっていく。1922年6月、大阪労働学校が開設されている。同校は、友愛会、向上会などの組合の連合体である関西労働組合連合会が最初に計画し、その崩壊後西尾末広、山名義鶴、村島帰之が引き継いで設立された⁽⁶⁰⁾。この大阪労働学校に労働教育会から「毎月20円の補助金」⁽⁶¹⁾を受け、同校は経営的に安定した。同校の経営委員は次の通りである。

委員長 高野岩三郎 会計 森戸辰男 委員 賀川豊彦 村島帰之 山名義鶴 河野密 小岩井浄 阪本勝 細迫兼光

社会思想社員と大原社会問題研究所所員と労働農民運動指導者とからなり、ほとんど「金太郎飴」状態である。

大原社研と社会思想社、我等社の人的つながりをみてみよう⁽⁶²⁾。創立期の大原社研の顔ぶれのなかには我等社社員の櫛田民蔵がいる。20年の森戸辰男事件後の機構改革によって大原社研に次のメンバーが加わった。まず森戸は刑を終えて研究員として欧州に留学した。そのほか、次のようなメンバーが加わっている。

19年12月 研究員 竹内謙二 助手 八木沢善次

20年3月、研究員 森川隆夫 4月、助手 植田たまよ 5月、助手 丸岡重堯 6月、助手 植田好太郎・山村喬・河西太一郎 7月、助手 林要 9月、助手 大内兵衛・権田保之助・細川嘉六（以上3名21年末研究員に）・山名義鶴

21年2月、助手 花田大五郎（6月、如是閑の紹介で読売に転出） 労働組合調査室主任 後藤貞治 5月、助手 宇野弘蔵 嘱託 水谷長三郎・小林輝次

新明正道は採用内定となったが関西大学へ転出した。1922年10月25日、長谷川如是閑が嘱託になっている。同時に小泉鉄が23年末まで嘱託となった。

ところが、22年11月27日、林・河西・八木沢・丸岡助手へ辞職勧告が出され、各大学へ転出したりした。25年4月には河野密が臨時嘱託となって『日本労働年鑑』の編集を担当した。29年8月には我等社の庄原達が河野に代わって年鑑編集に当たった。29年4月から越智道順・笠信太郎が資料室に勤務となった。

(60) 大原社会問題研究所編『大阪労働学校史』法政大学出版社、1982年、参照。

(61) 同前、36頁。

(62) 『大原社会問題研究所五十年史』1970年、参照。

以上のうち、矢木沢・丸岡・山村・河西・林・新明・河野・後藤が社会思想社同人で、如是閑、森戸、小泉、花田、莊原、笠(社会思想社同人でもある)が我等社社員である。このように大原社会問題研究所、社会思想社、我等社は人脈的にほとんど共通していたことが分かる。さらに、左翼の産業労働調査所やプロレタリア科学研究所とも交流があった。25年には高野岩三郎は産業労働調査所の顧問になっている。1929年大原社会問題研究所存廃問題が出た後においても産労への補助は月10円支出されている(社会経済研究所へは5円⁽⁶³⁾支出されている)。大原社会問題研究所所員の櫛田民蔵と細川嘉六はプロレタリア科学研究所所員でもあった(櫛田は30年6月脱退)。

第4には社会思想社の活動として社会経済研究所の設立をあげることができる。社会経済研究所は、労働教育会にかわって1927年6月末⁽⁶⁴⁾創設された。それは、「今日の我国労働運動の発展状態に於ては、労働者教育事業の後援よりも、調査機関の設置をヨリ必要」⁽⁶⁵⁾だという理由で有島財団からの基金をもとに設置されたのである。設立当初の10月には「労働調査」などをやるものあまり活発ではなく、28年10月1日より丸岡重堯が主任となって積極的に事業を展開しようとした。「昭和3年下半期事業報告」⁽⁶⁶⁾によれば、「農業綱領委員会」において『農業政策綱領』(春秋社、昭和4年)を発行した。ほかに「地方行財政委員会」「帝国主義委員会」「協同組合委員会」が開催され研究会が行われた。昭和4年度にそれを継続して刊行計画が発表されたが、同年2月末腸チブスで入院、3月30日死亡し、社会経済研究所も活動を停止した。

6 社会思想社の解散

社会思想社は日本大衆党成立に次のように大いに期待した。

「日労、日農、無産大衆等七党合同によつて新に日本大衆党が生れた。有害無益な対立抗争をイヤと云ふ程見せつけられてゐる吾々は、今回の合同に対し心からの喜びを禁じ得ない。」⁽⁶⁷⁾

ところが、29年福田狂二らの「清党」事件で日本大衆党が内紛を起こすと、次のように落胆を激しく示す。

「所謂「清党運動」に端を發した日本大衆党の内紛は、最近に至つて旧日本農民党の脱退、旧無産大衆党系の一部幹部の除名騒ぎにまで進展し事実上、旧日労党系のみの方党となつて了つた。結党後半歳に満たない間にこのブザマさ加減は一体どうしたのだ。今になつて考へると何んの為めの合同であり、戦線統一?であつたのか、……恐らくまたケン粒のやうな政党が梅雨期のカビのやうに出て来るだろうが、さう旗の染めかへばかりに浮目をやつしてゐる程日本の大衆も馬鹿ではあるまい「ダラ幹を蹴とばせ!」と云ふ声が、今にほんとうに大衆の間から起つて来るだろう。……勿論、日本大衆党なんて、成立の始めから寄木細工には違ひない。…真にこれを階級的政党にまで育

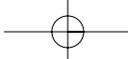
(63) 同前、70頁。

(64) 『社会思想』27年7月号。

(65) 『社会思想』27年9月号。

(66) 大原社会問題研究所所蔵原資料。

(67) T・S生(莊原達)、29年1月号。



成してゆくことが左翼当面の任務なのだ。」⁽⁶⁸⁾

こうして社会思想社は無産政党運動をめぐって意見の食い違いが明らかとなる。蠟山政道は次のようにはっきりと社会民主主義を支持し、社会思想社同人のなかにある「共産主義」との親和性を断ち切ることを要求した。

「(日本大衆党の分裂について)それは、どうしても日本大衆党の指導原理たるマルキシズムが共産主義的マルキシズムと如何なる相違を有するか、又有すべきものを明らかにしない罪に座するものであると思ふ。マルキシズムの何が真正なものかの本家争ひは別として、それには社会民主主義と革命共産主義との二つしかあり得ないものであること明々白々だ。...

この党を率ゆる、或はそれに属するマルキリストが、その主義内容の共産党のそれと異なる点をハッキリさせることに努力し、そして成功しなければ、その前途には尚ほ一抹の疑問が残ることになる。共産主義イデオロギーを有しつつ、尚ほその論理的及び実践的の帰結を徹底することもせず、或は講壇の上で、或は雑誌の上で、或は組合の中で、或は街上に於て、意識的無意識的に生活するならばそれは党にとって禍ひであると言わねばならぬ。この点は、筆者の属する社会思想社同人諸君の場合にも当嵌まる。同人中には共産主義のイデオロギーに育成され、それを研究しつつあり乍ら、自己の立場が、如何なる点に於て共産党と異なるかを実践上明確にしない人々がある。かかる態度は共産主義との対立が、国際的社会運動に於て先鋭化しつつある今日、長く許されざる立場であらうと思ふ。...

日本大衆党に比較的多いマルキリストも自己が共産党に属しないことを良心的に信じてつつあるならば、パウアーやヒルファデングと何処が共通が従つて社会民衆党と如何に協同し得るかを明らかにしなければならぬ。...

筆者は我が無産政党の発達に於ける社会民主主義の使命の重大性を信ずる。」⁽⁶⁹⁾

ところが、これに対して、同人から反対意見が述べられた。まず、友岡久雄は次のように述べて、社会民衆党に反対した。

「吾々は今や『社民党』の声明書が如何なる立場を代表するものであるかを之以上詮索する必要はあるまい。夫は無産階級そのものの立場ではなく、『社民党』幹部に妥当なる立場であり、夫以上でも以下でもなく、従つて又実に資本の立場であることが明瞭である。」⁽⁷⁰⁾

この批判はかなり古典マルクス主義の立場からのものであった。嘉治隆一は蠟山の「日本大衆党の立場」について「多少の疑問」を提出して次のように述べている。

「筆者は旧無産大衆と旧日労との分裂の理由を発見する事には苦しむけれども、断じてそれが社会民主主義と革命共産主義との区別を明確にせず、日本大衆党が二者の何れを指導原理とするか、又、すべきかを明白にしなかつたがために分裂したのではないと確信する。...

筆者は目下の情勢に於て分裂前の日本大衆党に向つてコムニズムの旗幟を明確にするだけの蛮勇を要求することも出来なかつたが、さればとて社会民衆党と合同しろといふだけの茶目気も有ち合

(68) T・S生、29年6月号。

(69) 蠟山政道「日本大衆党の立場」『社会思想』29年7月号。

(70) 友岡久雄「時観 金解禁と社会民衆党の立場」『社会思想』29年8月号。

せて居ない。日本大衆党は尚暫は統一戦線党として進んで行つて差支ないと思ふ。...

全体に涉つて何等かの組織を作り、それが全面的に働きかけなければならない。筆者は仮に之を新たなる前衛分子と名づけたい。かかる分子が新に各派の中から出て横断的に連絡をとつて組織的に全体を動かすのでなければ折角、統一戦線党が出来ても座して瓦解を待つやうなものである。...

近頃新聞紙その他を通して聞くが如くれば、極左派と見做されてみた人々の中にも、従来の自分達の運動方法の余りに機械的であり、迷信的であつたことを自己清算せんとする徴候が見えて来たといふ。又、社会民衆党の如きも関西方面に於て多少の動揺があるとも聞く。戦線の統一未だ必ずしも不可能と決まつてゐるわけでもなからう。とすれば、日本大衆党の前途、必ずしも行き詰つたとも断ず可きでない。」⁽⁷¹⁾

以上のように、この頃の嘉治は、明らかに組織活動については猪俣津南雄の横断左翼論、政党論については山川均の統一戦線党論に立っているのである。こうして、嘉治は合法政党としての新労農党樹立の提案が大山郁夫・細迫兼光・上村進によってなされると「諸君が自らの闘争の経験を通じて、我々が予想してゐたと同じ結論に達せられたといふ、この貴重な事実」⁽⁷²⁾と、若干皮肉をこめながらも同感の意を寄せたのである。

以上のように、社会思想社同人のなかに、政治的立場の違いがはっきりとしてきた。そこへ起こったのが、有島財団から貰った金の使い込み事件である。平は次のように回想している。

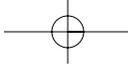
「社会思想社というのは、年に1回、多いときには2回大会を開いて、全国から集まっているいろいろなことを相談したり、打ち合わせたり、計画を立てたりしていた。そこで私が外国に行っている(29年2月出発、31年4月か5月帰国...引用者)留守中に、まだ有島さんからもらったあの金があるだろう、という話が始まつたらしい。そして、三輪と、細野と、河野密が、嘉治、蟬山、田中九一なんかにさんざんいじめられて、どうにも困って、平が出してもいいといったから、4人の連名で保証して出した、と三輪がいったそうだ。私が帰ってきてから、「きみ、すまんけれども、そういったからな」と私に詫びた。三輪もひどいことをするな、と思ったが、しかし三輪との仲だからべつにおこりもしなかった。けれども、それが社会思想社の連中の不信感を買って、もう一緒にやれないという気持ちになつた一つの理由だろうと私は想像する。」⁽⁷³⁾

「大正時代に麻生久さんたちは足尾銅山や日立銅山の労働組合運動をやつてつかまり、嘉治君と一緒に日立に会いにいったことがあるが、その後また争議が始まって、いよいよ負けそうになって四苦八苦していたとき、三輪、河野、細野の三人が悲愴な顔をして私のところに来た。それで金を貸してやった.....私が外国に行く前だから、昭和2、3年のことではなかったかと思う。私が外国に行っている間に、あの金はどうなっているかという話が出て、三輪がいじめられて困つたが、どうにも弁解できず、窮余のあまり「常務理事の平が承知したから」といったので、それ以上いわんでもいいじゃないかということになつた。一番追及したのは、嘉治君や田中九一らしい。それでい

(71) 嘉治「日本大衆党の道」『社会思想』29年8月号。

(72) 嘉治「新労農党樹立の提案」『社会思想』29年9月号。

(73) 前掲『平貞蔵の生涯』142頁。



いじゃないか、といったのは佐々君くらいだった。」⁽⁷⁴⁾

以上から、27、8年頃平貞蔵が麻生久に有島財団からの資金の残金を与えたこと、その責任を大会で激しく追及したのが、嘉治、田中で、賛成したのが佐々弘雄くらいのものであったことが分かる。ここから、三輪・河野・細野の中間派三人組が社会思想社で完全に孤立しているのが見て取れる。この責任追及の大会が31年1月4、5日に開催されたものであったようである。「大会開催通知」⁽⁷⁵⁾には次のようにある。

「規約に依り左の通り昭和6年度大会を開きます。

時 1月4日(午後1時開会) 1月5日(午前10時続開)

所 東京市神田区一橋学会館5号室

第1日議事日程

1, 各部報告

辞典部 佐々, 後藤 出版部 河西 庶務部 田中

2, 各支部報告

東京支部 山村 関西支部 林

3, 議案

社会思想社債権整理の件(東京支部提出)

4, 役員改選の件

第2日 研究会

1, 最近日本無産政党政運動之(?)論 莊原

2, 第三期の問題 未定

(持参すべき参考書 経済批判会編1930年世界経済恐慌第2輯)

附記

1, 地方同人旅費(三等汽車賃)片道支給

2, 出席の有無左記へ通知を乞ふ

東京市外中野町打越2078 田中九一

1930・12・15 社会思想社本部」

以上のように、東京支部長・田中九一が主催者となり、「社会思想社債権整理の件」だけを議案として大会が開催された。この「債権」は有島財団からの資金のことに違いない。この大会で、莊原、林要、田中、山村、嘉治らが、無産政党政中間派三人組を厳しく追及したと思われる。田中は「その資金がいつの間になくなってしまったことで、会合で大分気まずいことになったことは覚えています」⁽⁷⁶⁾と回想している。かくして、社会思想社は「右も左もだめ」という中間派から、左翼に親和性のある人々が主流となっていったのである。

⁽⁷⁴⁾ 同前, 166頁。

⁽⁷⁵⁾ 大原社会問題研究所所蔵原資料。

⁽⁷⁶⁾ 前掲「田中九一氏に聴く」195頁。

展 望

1931年末、社会思想社東京支部は入獄中の小岩井浄の家族慰問金募集を行っている⁽⁷⁷⁾。田中の企画したものであろう。このように、左派が主流となったとはいえ、社会思想社としての活動は活発に展開されたわけではない。『マル・エン全集』の翻訳などは社会思想社同人を個人として名乗って行われたことであろう。こうして社会思想社は1932年に解散する⁽⁷⁸⁾。

それに、嘉治・荘原ら同人の多くはすでに長谷川如是閑らの『批判』同人に合流していた。如是閑・大山郁夫の我等社には嘉治が創刊当初から常連執筆者であった。嘉治が如是閑に接近するのは学生時代だった。「私が初めて翁にお目に掛かったのは、私がまだ東京大学の学生の頃でありました。そして昭和(大正……引用者)9年に同大学を卒業後、偶々中野駅に近い高円寺に居をかまえてからは、東中野の上ノ原の御宅に屢々お邪魔し、「我等」誌の編集にも参加させて頂きました⁽⁷⁹⁾」という。社会思想社同人でもあり、『我等』の編集もしていた嘉治が仲立ちで、『社会思想』が合流する形で30年5月『批判』が創刊された。『我等』(如是閑と大山という意味での「我等」といういくらか閉鎖的なネーミングの雑誌に代わって『批判』(しかも創刊準備期には『現代批判』)という行動的、実践的な名称に変更された。創刊に当たって如是閑執筆の「批判」には、「社会科学は歴史的知識の手続きたるばかりではなく、歴史の創造の手続きであらねばならぬ⁽⁸⁰⁾」とある。これは、「断じて行わず」の如是閑がもっとも主体的に国家批判に入り込んでいく先触れのように思われる。如是閑は32年に『日本ファシズム批判』を大畑書店から刊行し、同年10月には戸坂潤らの唯物論研究会の会長に就任するのである。

『批判』誌面には中間派の人々は31年11月号に河野密が執筆して以後一切登場せず、如是閑・嘉治・荘原らが中心となって編集されていく。これにプロレタリア科学研究所や労農派の人々も誌面に登場するようになるのである。こうして、我等社、社会思想社、プロレタリア科学研究所、大原社会問題研究所などの研究者たちは急速にファシズム化を進める国家に対して批判的な、大きな知的共同体の形成に向かって歩を進めるのであった⁽⁸¹⁾。

(うめだ・としひで 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員)

(77) 大原社会問題研究所蔵、後藤貞治宛1931年11月17日付印刷物。

(78) 前掲『平貞蔵の生涯』 166頁。

(79) 『長谷川如是閑選集』補巻月報、1970年9月。

(80) 『批判』30年5月号。

(81) この動きは33年末でとりあえず終焉する。この頃左傾学者らの検挙が相次いでいる。『社会運動通信』によっていくつかの事実を示そう。

「長谷川如是閑氏シンパで検挙 事実無根ですぐ釈放 我国評論壇の雄如是閑長谷川萬次郎氏は22日朝中野区上ノ原の自宅より中野署に召喚され、警視庁特高課野中警部補の取調べを受けたが同日午後釈放された。」(昭和8年11月25日付)

「羽仁五郎氏転向か 共産党シンパの嫌疑で検挙された日本大学講師 自由学園教諭羽仁五郎氏(33)」(昭和8年12月4日付)

「シンパの嫌疑で舟木教授召喚 赤派党员との関係？」(昭和8年12月9日付)

「杉本栄一教授シンパで検挙 東京商大専門部教授杉本栄一氏(32)は数日前から杉並署に召喚され不拘束のまま警視庁特高部野中警部の取調べを受けているが同氏は故福田徳三博士門下の逸材で、さきに検挙された嘉治隆一、長谷川如是閑氏等と同じく共産党シンパの嫌疑を受けたものである。」(昭和8年12月13日付)

「長谷川如是閑再び召喚さる 唯物論研究会に関係している中共産党資金として百余円を提供した嫌疑で去月21日突如警視庁特高課に召喚取調べをうけた評論家如是閑長谷川萬次郎氏(59)は12日ふたたび中野区上野原町6の自宅から特高課に召喚野中警部補の取調べをうけた。同氏は思想的立場について究明されたもので唯物論はこう定するがマルクス主義に基づいた唯物論を主張するものではないと弁明して同7時帰宅を許された。」(昭和8年12月14日付)

以上のように、33年末には長谷川如是閑、嘉治隆一、羽仁五郎、杉本栄一、舟木重信らが検挙されたのである。

<p>富岡倍雄著 機械制工業経済の誕生と世界化 南北問題の経済学 ヨーロッパ中心主義史観を批判し南北問題に至る現代世界体制を歴史的に規定している根源を明示した新しい世界史</p> <p>(税別)四二〇〇円</p>	<p>作道洋太郎著 関西企業経営史の研究 江戸時代の企業者活動から経済近代化における経営形態を詳細に展開し関西の企業経営実態と企業家精神を抽出。</p> <p>(税別)五〇〇〇円</p>	<p>田中浩編 現代世界と福祉国家 国際比較研究 ヨーロッパ・北米・中南米・東欧・ロシア・アフリカ・中近東・アジア・日本の五六カ国の社会福祉と社会保障制度の現状を比較</p> <p>(税別)一五〇〇〇円</p>	<p>山田徹著 ヴァイマル共和国初期のドイツ共産党 一九二一年後半からの統一戦線運動の構造分析から二三年のルール闘争の展開と挫折過程を新資料を駆使し克明に論述。</p> <p>(税別)七〇〇〇円</p>	<p>田中正司著 アダム・スミスの倫理学(上)(下) 『道徳感情論』と『国富論』 『道徳感情論』初版から第六版、『国富論』初版から第三版改訂に至るまでの各部分の詳細な読解と文脈比較分析。</p> <p>(税別)各二八〇〇円</p>	<p>山内豊二著 日本農業論考 発展と混迷 日本農業の稲作・蚕糸業部門の発展と高度成長以後の小農体制のもとにある現在の農業の「混迷」を抽出する。</p> <p>(税別)五二〇〇円</p>
--	---	---	---	---	---

御茶の水書房 〒113 東京都文京区本郷5-30-20
TEL03-5684-0751 FAX03-5684-0753